



Title	S. ブラックバーンの準実在論と道徳の自然化 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	小林, 知恵
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14749号
Issue Date	2021-12-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83848
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Chie_Kobayashi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：小林 知恵

主査 教授 藏田 伸雄
審査委員 副査 准教授 宮園 健吾
副査 教授 加藤 重広

学位論文題名

S. ブラックバーンの準実在論と道德の自然化

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、現代メタ倫理学において最も影響力のある論者の一人であるサイモン・ブラックバーン(Simon Blackburn)の道德哲学に関する包括的な研究である。ブラックバーンの名は、その主要学説である「準実在論」「投影説」とともに言及されることも多いが、その道德哲学について総合的に論じた著作は世界的にも皆無である。そのような状況の中で小林氏はブラックバーンの道德哲学について総合的に論じ、その特徴を明確に示すことに成功している。小林氏は道德的言語実践や道德的認識に関する議論も含め、ブラックバーンの諸考察を横断的に検討することにより、準実在論はメタ倫理学の領域全体を見通す理論として理解可能であることを明らかにしている。

ブラックバーンの道德哲学の目的である「道德の自然化」とは、脱魔術化された非倫理的秩序の中に、道德ないし倫理を位置づけることである。だがそれは神の存在や命令を措定せずに道德を維持するという「道德の非宗教化」であるだけでなく、道德的探究が自然科学に包摂されることを否定する「道德の非科学化」をも指向している。小林氏はブラックバーンの準実在論が、それが支持すべきテーゼ群と重なっていることを明らかにすることによって、この道德の自然化とはどのような試みであったのかを具体的に明らかにしている。

20世紀半ば以降のメタ倫理学では、〈客観主義・道德実在論・反相对主義〉対〈主観主義・道德反実在論・相对主義〉という対立軸があった。しかし道德の客観性に疑義を呈した主観的道德理論である情動主義が登場して以降、道德の客観性を主張することは困難になりつつある。本論文では準実在論が道德の主観的側面と客観的側面の両方を捉える理論として解釈され、それが反実在論に与しながらもニヒリズムや相对主義といった倫理学への脅威を退けていることが示される。

だがブラックバーンの「準実在論」は、複数のメタ倫理学理論(投影説・表出主義・真理の構成説)やテーゼの組み合わせから成るので、それらの間に整合性はあるのかという疑問が生じる。小林氏はこの問題について検討することで、メタ倫理学理論としての準実在論の独自性を明らかにしている。ブラックバーンは、準実在論が実在論から距離を保ちながらも、相对主義に陥らないことを明らかにしているが、小林氏は、その試みが成功しているのは、「統制的理想であり虚焦点である真理」という概念を彼が導入したことによるとしている。

またブラックバーンのメタ倫理学上の主張を規範倫理学、具体的には動機帰結主義に結びつけたことも、本研究の成果の一つである。

・学位授与に関する委員会の所見

ブラックバーンの多岐にわたる主張からその道德哲学の全体像を描き出すことは容易なことではないが、小林氏はそれに成功している。小林氏は道德的实践における感受性に注目することによって、「道德の自然化」という目的をブラックバーンがどのように達成しようとしたのかを明快に説明し、ブラックバーンがメタ倫理学の新たな領野を切り開いたとする。

なお本論文では自然主義が最初に設定され、その枠の中で自然主義的実在論とブラックバーンの

準実在論とが対比させられているが、このような問題設定そのものにも疑問がないわけではない。また本論文ではブラックバーンの議論に即して他の倫理学説が検討されており、ブラックバーンの学説そのものに対する批判的な検討も必要なのではないか、という意見もあった。特に本論文では、非実在論である準実在論に対立する実在論的理論である非還元主義的自然主義的道德実在論(コーネル実在論)が論敵として設定されており、その立場では自然的性質と道徳的価値との随伴関係(スーパーヴィーニエンス)が説明できないとされているが、これはコーネル実在論に対する過剰な要求ではないかという指摘もあった。

上記の問題点については口頭試問の際に小林氏による詳細な回答があった。またこれらの問題点は本論文で得られた成果に比べると些細なものであり、氏が今後の研究の中で解消していくものと思われる。

難解と言われるブラックバーンの道徳哲学について明快な文章で論じていることは、委員会一同によって高く評価された。メタ倫理的な議論と、規範倫理的な議論を結びつけることについては疑問も提示されたが、そのような姿勢は本論文の長所でもある。今後本研究が、日本におけるブラックバーン研究において参照される文献の一つとなることは間違いないと言ってよい。

本論文審査委員会は以上の審査結果に基づき、本論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。